

ミンダナオの風

発行：ミンダナオ子図書館 編集：松居友

60号・2017年6月



不登校や悩みを抱えた若者たちがミンダナオ子ども図書館を訪れると現地で貧しくても、笑顔で生きる子たちを見て感動し、未来への希望、生きる力がよみがえる。ミンダナオ子ども図書館を訪れた日本の若者のなかのある子たちは、その後、大学に行きたくなって頑張ってサポート校やフリースクールを卒業し何と大学に合格！
情勢が安定したら、MCLダバオハウスからダバオの大学に留学予定の若者もいる。日本の青少年の自殺率は、事故死を含むと世界でも最高レベルだという。一方、フィリピンの青少年の自殺率はアジアでも最低レベルだ。
日本の青少年だけでなく、孤独な中高年の人々も考慮してミンダナオ子ども図書館では、サンタマリアに海の下宿小屋を建てて訪問者も滞在出来る場にする事に決めた。サンタマリアの漁村やキアタウの山村で生きる力をもたらって帰る若者たち。ひたすら頑張って、勝つことよりも友情と愛こそが生きる力。

海のMCL 松居友

ミンダナオ子ども図書館の下宿施設を、美しいミンダナオの海辺に作りた
いという夢が、いよいよ実現に向かっ
て動き始めた。

場所は、ダバオ湾の東側にはりだし
た小さな半島の先端にあるクラクシン
という名の小さな漁村で、ときどき、
ウエップサイトの「ミンダナオ子ども
図書館*日記」や松居友のフェイスブ
ックでも紹介してきたから、知ってい
る方もいらっしやるかもしれない。

海のMCLを作りたいと思いたって
7年の歳月が流れた。すでにアラカン
の山とマキララの山には、男子寮と女
子寮があり、孤児や崩壊家庭、そして
極貧で3食たべられず、学校まで遠く
で通えない子どもたちが住んでいる。

スタッフも常駐し、子どもたちには
米とおかずを提供している。街に有る
大学生の寮にも米を支給しているか
ら、総勢200人分で一日200キロ
の米が消費されるけれども、なんとか
水田で自給している。野菜も子どもた
ちが頑張って植えて自給している。

自由寄付をはじめ奨学金で子供たち
を支援して下さっている皆様、本当に
ありがとうございます。

その後、支援者の方々が訪れるよう
になり帰りがけには涙を流され、感動
と生きる喜びを現地の子どもたちから
受けとられて涙を流されて帰られる。
とりわけ青少年が大泣きに泣いて、自
殺や引きこもりや心の病で悩んでいた
子たちが、生きる力を受けとって帰っ
ていくようすを見て、5年ほど前から
ミンダナオ子ども図書館の門戸を開い
て、青少年や親たち、そして中高年の
方々も受けいれる体制を作ってきた。
特に山の先住民と生活を分かちあう
山のMCL体験が大好評で、リゾート
では無く素朴な漁民たちと生活を分か
ちあえる、漁村体験をさせてあげたい
と思うようになった。それが、今回の
企画の出发点になる想いだっただ。

ミンダナオ子ども図書館では、滞
在を希望される方々からは、宿泊料
を取っていません。お客様としてでは
なく、家族の一員として子どもたち
が皆さんを、お迎えできるようにし
たいからです。

海の下宿施設を可能なら来年初め
にも建設したいと思っています。可能
な方は、振替用紙に「海の家」と書いて、
寄付をしていただければ幸いです。完
成しましたら開所式をして、お名前
をボードに記載させていただきます。

海の下宿小屋を作ろう

ミンダナオ子ども図書館で海の下宿
施設を建てようと思っっている場所は、
ダバオ湾の東側にはりだした小さな半
島の先端にあるクラクシンという名の
小さな漁村で、ダバオ・オクシテナ
ル州のサンタマリア市に属している。

クラクシン村は、爽やかな青い海に
囲まれている素朴な漁村で、濃い緑の
熱帯雨林の丘陵の前に、それはそれは
美しいまっ白な砂浜が広がっている。
半島の先端までは、漁民のカヌーで海
を越えていくのならまだしも、陸路と



なると4WDのピックアップトラック
に乗って、ときにはマンゴーの林のな
かをくぐり、浜辺から生えているマン
グローブの横をぬけていく。

いくつもの貧しい竹作りの漁師さん
の小屋を横切ると、中から子供たちが
手を振ってくれる。漁舟は4人も乗れ
ばいっぱいになるような手作りの双頭
のカヌーで、両サイドには高波が来て
もひっくり返らないようにアウトリガ
ー(竹の浮き)が付いている。このダ
ブルアウトリガーのカヌーこそ、ミク
ロネシアからこの地域にいたる伝統的
な漁舟なのだ。

この半島は、先住民とイスラム教
徒とキリスト教徒が、仲良く共生して
きた地域なのだという。

半島の先端に向かって、いくつもの
漁村を抜けていくと、集落にはときに
はイスラム教のモスクが、ときには小
さなキリスト教の礼拝堂が建っていて
(モスクや礼拝堂といっても竹壁の小
さなものだけだ)、それを見ると村
の住民が、イスラム教徒かキリスト教
徒かがわかる。たとえ礼拝堂が無くて
も、家のまわりで飼っている家畜を見
れば一目瞭然だ。イスラム教徒の村に
は山羊が飼われているし、キリスト教
徒の村では、母豚のまわりを子供たち
が走りまわっているから。まるで先住

講演会、報告会、家庭集會に、松居友が謝礼に関係なくうかがいます。

サイト『ミンダナオ子ども図書館だより』から年間のスケジュールをクリックすれば、空き日が確認できます。

講演や家庭集會の設定も、輪を広げていくための、大きな支援のひとつです。

メールや電話でもお申し込みください。メール：mcltomo@yahoo.co.jp

電話番号：080-4423-2998 (日本および現地転送・松居友)



民とイスラム教徒とクリスチャンが、仲良く共同生活をしているミンダナオ子ども図書館みたいだなあ。ここだったら下宿小屋を作ってもいいなあ、と思った。

半島の先端に向かうにつれて、道はいよいよ細くなり、時には細心の注意をはらいながら岩崖の横を、満潮時には、海水に浸りながら岩盤を乗り越えて行かなければならない。

「この先に、本当に道がまだあるの?」と思うような海沿いの細い道を、小一時間かけて走って行くと、最後に小村の脇から丘陵に向かって穴だらけの急坂に出る。そこを猛烈な勢いで駆



け上ると突然峠に飛びだして、目の前にあつと驚くほど広大な海が広がる。その風景に圧倒されて、しばし車から降りてたずむと、左正面に遠くアポ山の姿が青くかすんで見える。アポ山は、フィリピンの最高峰で2954メートルありミンダナオ子ども図書館のあるキダバワン市が登山口だ。

ダバオ湾は広くて、対岸まではほとんど見えず、まるで広大な外洋を目の前にしているようだけれど、よく見るとかすかに右手の方に陸の姿が浮かんでいる。ダバオオリエンタルと呼ばれる東の半島だ。

ふたたび車に乗りこみ見おろすと、浜辺まで濃緑色の椰子の林が広がって、丘陵の斜面を下りきると椰子の森のなかに、まっ白い浜辺のクラクシン村が見えてくる。

村は素朴で、住んでいるのはほとんどが漁師さんたちだ。舟は浜に並んでいる大小のカヌーだけ。でも濃緑のヤシの木に囲まれて青や赤や緑に塗られた色とりどりのカヌーたちが、紺碧の空の下で透き通るような青い海を見ながら、まっ白な砂浜に並んでいる様子は本当に美しい。ほとんどが浜の大王さんが作った手作りのカヌーだ。大方が手こぎのカヌーだけれど、中には簡単なモーターが付いたやや大きめのカヌーも並んでいる。

カヌーの横では、深夜から早朝にかけての漁から帰ってきたお父さんたちが、座って細く白いナイロンの漁網を手縫いで修理したりして、そのわきで、まだ学校に行っていない幼い少年や少女たちが、遊んだりお父さんの仕事を手伝ったりしている。

海に向こうから浜に向かってカヌーが帰ってくると、浜で遊んでいた子どもたちや、お母さんたちもバケツを持って家から飛びだして駆けよってきて、舟底でまだピンピン跳ねている魚やエビやタコを入れて家に運ぶ。

家と言っても、まわりの風景に溶けこんでいる小さな素朴な竹小屋で、台風が来たら簡単に吹き飛ばされてしまうような代物だ。それでも、幸いミンダナオは、台風に襲われることはほとんど無い。

クラクシン村のあるサンタマリア市とのおつきあいは、すでに4年近くなり、保育所を建てたり、親がいなくなつて苦労している奨学生も採用しはじめている。

ミンダナオ子ども図書館は、サンタマリア市の福祉局と連携しながら、背後の山岳地帯にも活動範囲を広げており、保育所を建設したり奨学生を採用したりしてきた。

海辺に住む人々は、まだ漁をして稼げるけれども、山岳地帯の人々はさらに貧しい。住んでいるのは、大方が先住民のカラガン族で、対岸のマティに多くいるマンダヤ族と言語が似ている。山岳道路を数時間、山超え谷超え数時間行くと「なぜこんな奥地に?」と思われるような山岳地域に集落を作つて生活をしている。ダバオから湾岸沿いをデイゴスに入りサンタマリアに向かう広大な平地は開発の手が入り、ほとんどが広大なバナナやパイナップルのプランテーションで何とジェネラルサントスあたりまで続いているか

ら、山岳地帯の人々は、もともとは平地に住んでいた先住民たちで、農地開発によって低地にあった自給地を追われて山岳地帯に住まざるを得なくなっただけの人々であることがわかる。

そのような貧しい村では、保育所を建てることは不可能に近い。数年前に、フィリピン政府が、保育所が幼稚園で一日に2時間ほどABCを学ばないと小学校に入学出来ないとしたものだから、小さい子が何時間も山道を歩いて通うなど不可能で、貧しい村の子どもたちは大変なのだ。そんなわけでミンダナオ子ども図書館では、市の福祉局と連携して、支援者の寄付で、今まで70棟以上の保育所を建ててきた。サンタマリアにも数棟建てたけれども、まだまだ足りない。

海沿いのある村に保育所を建てた時のことだ。開所式の日、驚くべき事実が語られた、その村は第二次世界大戦前まで、日本人が住む日系人の村だったというのだ。

開所式の時、いつもは町に住んでいる地主で村長と呼ばれている方が訪れた。他の村人たちと比べると背が高く、白人の血が混ざっているように見受けられた。

その方は、開所式の挨拶がすみ立食パーティーの時に、ぼくの端に立ちこ

う語った。「私の息子は、大学を出て病院で看護師をしているのだが、だれか日本人の娘さんを紹介してくれれば、結婚させたいのだが・・・」ビクビクして話を聞くと、彼の家族はなんとこの村全域の土地(数百ヘクタール)を所有する大地主で彼自身もかつて市長も務めたという。しかし、偉ぶること無く質素で開けっぴろげの好感が持てる性格の方だ。「実は、この土地は、戦前まで日本人たちが住みついて、漁もしていた場所だったのだよ。しかし、第二次世界大戦で日本がアメリカに敗北した後、この土地は私の母に贈与された。」



聞くと、彼の父はアメリカの占領軍の司令官だったそうだ。そして、戦争が終わると、広大な土地を妊娠していた母に与えて米国に帰ったのだという。それ以降、彼は父に会ったことはない。

「ところが、ここはもともと日本人の移民たちがすでに住んでいた村だったので、母は住んでいる日本人たちを追いつくこと無く住まわせた。ただし土地の所有権と生えている椰子や果実や木材の権利はわれわれ一族の所有となり、住民は小作として利益の一部を与えることと、トウモロコシなどの野菜は植えて良いことになっている。だから、今日この保育所の開所式に集まっている人々の多くも、日本人の血が混じっている日系人たちなのだよ。」

驚きだった。しかし、そう言われて辺りを見回すと、確かに大人も子どもたちも表情がどこか日本人的な親しみが感じられる。テーブルの向こうで食事をしている村の幹事を見ると、話を耳にしていたのかニヤッと微笑んだ。

「息子が、せめて日本人と結婚してくれたら、私たち一家も、日系人になれるんだがなあ・・・」この村の斜面にも、貧困で食べるのにも窮している家族が沢山いるという。その後、学校の先生と相談して、その中でも特に親

を失ったり、家庭が崩壊して苦勞して子どもたちを数名奨学生に採用した。

そんなわけで、何度か村に通い、浜で子どもたちと楽しい時を過ごし、保育所を建て、サンタマリア市の市長や福祉局の方々とも懇意になるに当たって、この地域に下宿小屋を作りたいという気持ちが高まってきた。

クラクシン村の子どもたちは、浜辺を歩いて小学校と高校(日本で言う中学校)に通っている。周辺の村々をめぐり、各村を調査した結果、歩いて通える範囲に高校も出来ることがわかった。それならば、ここに下宿小屋を建て、先住民、イスラム教徒、クリス



自由寄付は、一番根幹になる寄付です。

貧困集落に住んでいる子供たちの薬から手術に至るまでの医療費。保護を必要として、MCL本部や下宿小屋に住み込んで学校に行かせている200名ほどの奨学生の生活費。ガンソリン代を含む活動全般の諸経費等々。機関誌を楽しみにしている方の場合は、わずかな寄付でもお送りします。他の方々に紹介していただければ幸いです。

チャンの孤児の子たちを奨学生として15名ほど住まわせて、スタッフも常時滞在させて、ここに海の下宿小屋をつくれば、夏休みやクリスマス休暇にも、本部の子どもたちも遊びに来られるし、日本からの訪問者たちも素朴な漁村体験で心を癒やせる。

この地域の子どもたちは、ほとんどが大学まで通えないけれども、ここで卒業した後にミンダナオ子ども図書館の本部の寮に住めば、大学に通って先生になる夢もかなえられる。

クラクシン村は幸い交通の便が悪く、大規模なリゾート開発は不可能な場所だから、素朴な漁民の生活が今後



も守られていくだろう。それも、子供たちには良いことだ。

こちらで活動しているうちに、ほくはリゾート嫌いになってしまっていた。特に国際リゾートというのは、現地の生活からかけ離れた、外のお金持ちの遊び場だし、とりわけ先住民の住んでいる山の方で、「ここに国際リゾートを作るから1万円やるから出ていけ!」と言われたバゴボ族の酋長が、「ここは、先祖伝来の土地だ。出ていかない!」と言ったとたん、その場で撃たれて殺されて、母親もお腹を撃たれ、当時はまだ小学生だった少女も両親に駆けよったとたん足を撃たれた。

その娘さんを、ミンダナオ子ども図書館の奨学生にして、いまは中学生になっているけれども、それくらい、民泊ならまだしも、何だか国際リゾートというものに、心理的な抵抗感を感じるようになってしまったようだ。

そんなわけで、いつかどこかに学校に行けない子たちを十数名ほど収容する下宿小屋を建てるならば、素朴な漁村に寮を建ててカヌーも買って、子どもたちが自分たちの手で魚をとって浜で干して、干し魚をみんなで作って食べていけるような場所にしたと思うようになった。そうすれば、ミンダナオ子ども図書館の子供たちのおかず代

も節約できるし、大学まで行けない子ども、立派な漁師になれるだろう。

海の下宿小屋を作りたいと思っても一つの理由は、ミンダナオ子ども図書館を解放して、とりわけ悩みの多い日本の青少年や中高年の方々にも、門戸を開くことを決断したことだ。

山の下宿小屋のあるラナコランには、素朴なマノボ族の村キアタウがあり、その村で電気もない小屋に訪問者たちが泊まって共に植林をしたり、いっしょに川に泳ぎに行ったり、夜松明をもってカエルをとってきて食べたりという素朴な生活を体験し。また、貧しくて友情と愛に満ちた村の子ども



たちと時を過ごして、心がいやされて生きる希望と力をもらって日本に帰っていく経験が出来ることがわかってきた。

そんな、若者たちや中高年の方々を見てみると、どうしてももう一つ本物の海の漁民達の生活が体験できる場所を見つけて、子どもたちと一緒にカヌーで魚を捕ったり干物を作ったりする体験をさせてあげて、同時に現地の村の子どもたちとも浜辺でカニを捕ったり、貝をひろったり、モズクや海ブドウを採ったりして食べる友情体験をさせてあげたいと思うようになった。

ぼく自身も、まだミンダナオ子ども図書館を設立する前に、マティでそのような体験をして、本当に心を癒やされた経験を持っているし、そうした経験を通して落ちこんでいた子どもや若者たち、また中高年の方々が、どれほど心が癒やされ生きる原点到ち返り本物の「生きる力」を得られることがわかっていたから・・・。





それにしても、2年ほど前から、老齢の両親の願いもあり、妻と二人の娘と日本を拠点に現地を往復して活動しているものの、留守にしていた15年間の日本の変わりように驚きを隠せない。毎日のように電車が止まり人身事故が報告される。その多くが自殺で、青少年の自殺率は事故という理由で統計から外されているものを加えると世界でもトップクラスだという。そんな日本の子供たちも救いたい。

クラクシン村のあるサンタマリアは、ダバオ州に属していて、日本政府の発令している危険度が一段低い。そして、今年からミンダナオ子ども図書館

館は、北コタバト州の管轄下の特定非営利法人から、フィリピン政府直轄のNGOに認定されたのだ。その結果、活動範囲もフィリピン全土に可能となった。

ミンダナオは、今は戒厳令などが出され不安定だが（といっても、かつてよりは格段に平和で、かつてはもっとひどかったのに全く報道されなかった）これから先の10年を考えると、平和になっていくと思えるし、今から次の10年の準備をしていく事が、ミンダナオの子どもたちにも、日本の青少年や中高年の方々にも大切だと感じている。

すでに、青い海と白浜、そこで遊ぶ子どもたちの様子を映像で見て、ぜひとも息子や娘、若者たちを連れて、訪問したいと言う方々も増えてきていた。ミンダナオ子ども図書館の理事のお一人で、カヌーイストの野田知佑さんたちとカナダのユーコン川を下られ、「川ガキ養成講座」を主催している日本障害者カヌー協会の吉田義朗さんもそのお一人で、わざわざ日本からシーカヤックを携えてクラクシン村に來られた。今、日本でのパラリンピック開催の役員として活動していらっしやる。

そんなわけで、保育所の先生に相談

すると、村の一番外れの土地が空いていて、ぜひミンダナオ子ども図書館に格安で提供したいという。そこは村はずれで、カラオケの騒音からも遠く静かで眺めも素晴らしいので、思いきって購入した。

ミンダナオ子ども図書館は、15年の歳月を経て、いよいよ土台の上に家を建てる時が来たような気がします。これからは、国境という壁を取り去って、日本の子どもたちのみならず、ASEANからその先のインドや中東、アフリカ諸国。そしてさらに隣国の中国や車を寄贈してくださった台湾、韓国、朝鮮、ロシアをはじめ、学生時代に住んでいたドイツやアメリカ、かつて訪問してきた若者のいるカナダなど、欧米の若者たちとの交流も視野に入れて、これからの10年を形作って行きたいと思っています。

ミンダナオ子ども図書館では、滞在を希望される方々からは、宿泊料を取っていません。お客様としてではなく、家族の一員として子どもたちが皆さんをお迎えるようにしたいからです。そのかわり、同じごはんをみんなと一緒に食べ、いっしょに読み語りや村に行ったり、スタッフと活動を共にする体験が出来ます。

状況にもよりますが、訪問をご



希望される方は、現地スタッフの宮本梓（あずさ）さんにメール mcmindanao@gmail.com で、ご連絡なさって下さい。サイトにも、訪問に関する記事が掲載されています。

検索：ミンダナオ子ども図書館だより
海の下宿施設を可能なら来年初めにも建設したいと思っています。目標は、350万円です。可能な方は、振替用紙に「海の家」と書いて、寄付をしていただければ幸いです。完成しましたら開所式をして、お名前をボードに記載させていただきます。

講演会、報告会、家庭集會に、松居友が謝礼に関係なくうかがいます。

サイト『ミンダナオ子ども図書館だより』から年間のスケジュールをクリックすれば、空き日が確認できます。

講演や家庭集會の設定も、輪を広げていくための、大きな支援のひとつです。

メールや電話でもお申し込みください。メール：mcitomo@yahoo.co.jp

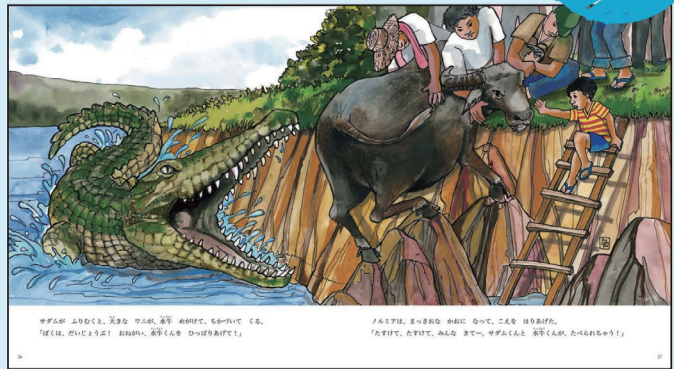
電話番号：080-4423-2998（日本および現地転送・松居友）

フィリピン・ミンダナオ島で100人の「山の子どもたち」と暮らす著者が、
日本の子どもたちにおくる、「本当の豊かさ」を考える絵本第2弾!

松居友の
最新刊!

サダムと せかいいち 大きなワニ

松居友 文 ボン・ペレス 絵



定価 (本体 1600 円 + 税) ISBN978-4-905530-66-4
23cm × 21cm / 32p / 幼稚園年長〜対象 / 総ルビ / 今人舎・刊

文 / 松居 友 (まつい とも)

1953年東京生まれ。1979年上智大学大学院独文修士課程修了。ザルツブルグ大学留学。元・福武書店 (現ベネッセ) の児童図書編集長。2003年、フィリピン・ミンダナオ島に現地 NGO「ミンダナオ子ども図書館 (MCL)」設立。2012年、現地マノボ族の洗礼を受け酋長となる (洗礼名アオコイ・マオンガゴン: 心から人を助ける我らの友)。父は、福音館書店・初代編集長の松居直氏。著書は『わたしの絵本体験』(教文館)、『サンバギータの白い花』(女子パウロ会)、『手をつなごうよ』(彩流社)、『サンバギータのくびかざり』(今人舎) ほか多数。

● ミンダナオ子ども図書館 (MCL)
<http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews.htm>



絵 / ボン・ペレス (Bong Perez)

1970年、フィリピン・ミンダナオ生まれ。1991年、ミンダナオ・ダバオのフォード・アカデミー・オブ・ジ・アーツで学士号を取得。1998年、日本の文部省 (現・文部科学省) の奨学金対象者に選ばれ来日。2002年に佐賀大学で修士課程を修了し、2005年、九州産業大学で博士号を取得。6年半日本で過ごしたのち帰国。2016年現在、フィリピン大学ミンダナオ校で教授を務める。フィリピン国内では7つのコンクールで1等受賞。日本では東京、広島、福岡などで個展、グループ展経験があり、2001年にはオーストラリアで書籍の表紙に採用されるなど活躍。絵本は松居氏との『サンバギータのくびかざり』(今人舎) に続き、本書が2作目。1女2男の父。

● <http://bongperez.tk>



バックンこと、
パトリック・ハーラン氏
推薦!



アメリカ出身お笑い芸人 /
東京工業大学非常勤講師

僕は本書の著者、松居さんが運営する「ミンダナオ子ども図書館」を訪れる機会があり、そこで子どもたちの朗らかな姿に深く感動しました。絵本を通して、少しでもミンダナオの子どもの素敵さに触れていただければと思います。ワニよりも大きなメッセージを感じ取ってください。

【お話】 湿原に暮らす少年サダムは、
父親の代わりに漁で家族を支える。
あるとき大雨が続き、てっぼう水で家が流された。
水牛で丘の上の学校を目指すサダムに、
せかいいちの大ワニがしのびよる!

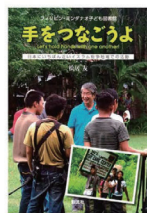
好評既刊本



『サンバギータのくびかざり』

貧しくても寂しくても、力強く生きる少女リンと、リンを支えるあたたかい人々を描いた絵本。

定価 (本体 1600 円 + 税) ISBN978-4-905530-38-1
23cm × 21cm / 32p / 幼稚園年長〜対象 / 総ルビ
● 今人舎・刊



『手をつなごうよ』

日本にいちばん近いイスラム紛争地域での活動!

15年前、松居友がなぜフィリピンの紛争地域にくらす決意をしたのか。彼のつくった「子ども図書館」とは?

定価 (本体 1800 円 + 税) ISBN978-4-7791-2223-1
A5 判 / 176p / 小学上級〜対象 / ルビ付き
● 彩流社・刊

—— 本の松居友の印税はすべて、ミンダナオ子ども図書館に寄贈されます ——

夏休みの補習と、初めての海

宮木 梓

サンタマリアの海に行ったら、お土産に海の水を持って帰ってきてよ。

・・・？海の水？

そうだよ、私、その水で塩を作るから。

え！塩って海の水から作れるの！？

そうだよ、海の水は塩味だよ。

4月4日は、小学校の終業式だった。

これから2か月の、長い夏休みが始まる。終業式の次の日にはもう早、イスラム地域のピキットと山々が連なるアラカンへ、子どもたちを送る車が出て、みんなは火にかけてポップコーンみたいに大騒ぎで家に帰って行った。

帰省するのは、お正月以来3か月ぶり。これから2か月を故郷で過ごせるのが、うれしくてしょうがなく、飛び跳ねずにはいられない。

そんな友達や弟を、涙目で見送っている子がいる。ジョバート、16歳。私の3人目の里子で、小学5年生が終了したところ。どうして彼がお家に帰れないかって・・・。

彼は、小学校で、夏休みの補習を受けなくてはならないのだ。



ジョバートは、それはもうショックでショックで、ハウスペアレントのジェイさんや、スカラシップ部のローズさんに、泣いて「家に帰る」と訴えた。けれど、字が満足に読めない小学生や、数学や英語の単位を落とした高校生の奨学生たちが少数、補修を受けるためにMCLに残ることが決まっていた。夏休みに勉強の遅れを補わなくては、新学期からの授業についていけない。

ジョバートは、昨年の6月に奨学生になって、アラカンのトゥマンディン小学校からMCLの近くにあるマノングル小学校に転校し、MCLから通学するようになった。

なったのはいいけれど、新学期が始まって一か月もしないうちに、学校に

行きたくないという。授業の途中で教室を抜けて、寮に帰ってきてしまう。授業中、ずっと寝ている。ノートを何も取っていない。

私たちは、気がついた。彼は、教室で先生が何を言っているのか、ほとんど分かっていない。授業で使う英語やタガログ語もだけれど、私たちが共通語で使っているピサヤ語も、どうやらあまり分かっていない。彼の母語は、マノボ語だ。

ジョバート、アルファベットでAからZまで書いてごらん。ああ、Hが抜けているねえ。Jもないよ。ほう、Jがないと自分の名前が書けないよ。

ジョバート、Thank you って綴れるかな。ああ、分からないねえ、英語だもんねえ。ああ、I love you. は書けるんだね、よかった。これでアメリカ人やイギリス人にラブレターを送れるよ。

ジョバート、今日は掛け算の九九を練習しようか。ああ、九の段は丸覚えできたけど、八の段も七の段も、六の段も難しいねえ。

どうしてジョバートが小学5年生に上がったのか、トゥマンディンの先生が進級させてくれたのか不思議に思う。けれど、山の小学校に通う子ども

たちは、毎日通学することが難しい。学校が遠いし、大雨が降れば道が悪いし、お米が買えなければお弁当を持って行けず、午前の授業だけで帰宅することもある。両親の畑仕事で忙しかれば、男の子は手伝いに一緒に出るし、女の子は弟、妹の世話がある。山の小学校の先生たちは、そんな子どもたちのことを分かっているから、きっとジョバートも5年生になれたのだ。

必死に補修に抵抗していた彼だけれど（私には帰ると嘘をついていた。おもしろい）、ジェイさんとローズさんに説得され、泣く泣くMCLに残ることになった。

4月16日から3泊4日でサンタマリアに海水浴に連れていってもらえるという大ニュースは、第一報が出てすぐ、その晩のご飯が炊きあがる前子どもたちの間を駆け巡った。

夏休みのMCLも、補修を受ける子どもたちだけでなく、様々な事情で家に帰れない子や、日本に公演に行く練習のために帰省していない子たちがいて、人数が少ないといってもやっぱり賑やかなのだ。

私は行かないことにした。初めてサンタマリアに行ったとき、砂浜キャンプで体調を崩した軟弱者の私は、「サ

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも孤児や片親、母子家庭の子、親がいても学校にいけない子を採用基準とし、大学まで通えます。その中の特に何らかの事情で保護を必要としている子は本部に住み、生活を保障。学費の他に、医療費、制服、学用品、小遣い、寮下宿代、生活費等が入っています。



どこかに
出かける人
には、「気
をつけて
行って来て
ね」のお別
れと一緒
に、「お土
産よろし
く！」とい
うのが、こ
の辺りの埃
撈らしい。

子どもたちが海に行ってしまったM
CLは、人がいるのに、空気を寒天で
固めたようにどこか静かだ。
夏休み中は、一日中子どもたちが家
にいてキヤアキヤア遊んでいた、ご
ろごろしているから、休みが早く終
わって新学期が始まらないかな、と
思っていたけれど、いなくなるとつま

らない。今ごろ、みんなは海から昇る
大きな朝日と、それに向かって漕ぎた
す漁船を眺めながらコーヒーを飲んで
いるのかな。漁師さんから、揚がった
ばかりの魚を買ってお汁を炊いている
かな。夕陽が落ちて泳いでいるか
な。真つ暗な海の上に浮かぶ月明りの
下で、歌っているかな。燈台の灯と満
天の星がチラチラと燃えてきれいだろ
うな。
みんなが帰ってきた日の夕食は楽し
い。そっちのテーブルでも、あっちの
テーブルでも、3泊4日ぶりの再会を
懐かしむ笑い声がある。日焼けして
帰ってきた子どもたちは、潮風に吹か
れていた記憶を残している。
おかえり、ジョバート！会えなくて
寂しかったよ(本当だよ)。初めての海、
どうだった？
疲れた！
え！それだけ？他に感想はないの？
サンタマリア、めっちゃ遠い！はー、
帰ってきてよかったあ。
もちろん、彼はお土産のことなど
すっかり忘れていて、私は塩を作らな
くて済んだ。



私たちは支援のパートナーを組ん
で、ようやく1年になる。しかし、昨
年の7月には、彼は5年生を終了でき

ンタマリア」と聞くと、つらかった思
い出が蘇る。海に行く子たちには、「ア
ズサも行こうよー！」と言われ、日本
で披露するダンスや歌の練習があるの
で行けない子たちには、「アズサ、行
かないんだ！MCLに残ったもの同
士、楽しく過ごそうねー！」と言われ
る。
旅は、そこに着くまでが一番楽しい。
私たちは、海に行ったことのないジョ
バートの期待を膨らそうと、たくさん
サンタマリアの話をする。ニモが泳い
でいるんだとか、ウニが足にささるだ
とか、漁村の女の子がかわいいだとか(適
当に言っているだけだけど)、サメが
いるんだとか(本当は見ただけのことないけ
れど)。

本当にお土産を期待しているのではな
いから、本当にお土産を買って帰って
くるとびつくりされる。お土産を買え
ないのに、「お土産よろしく！」と言っ
て笑うのが楽しいのだ。ジョバートに
も、お金なんてあるはずないけど、やっ
ぱり「気をつけて帰ってきてね」のこ
とばと一緒にお土産を頼まなくてはい
けない。それで、お土産に海の水。
きれいな貝殻じゃあ、おもしろくない。
まかせて！オレ、ゴミ箱のペットボ
トル洗って、サンタマリアに持って行
くから！それに海の水を入れて帰って
くるよ！
彼は、教室での勉強はできないけれ
ど、素直で馬鹿正直で、優しいのだ。
さあ、本当にジョバートが海の水を
持って帰ってきたら、それで塩を作ら
なくてはならない。太陽の下に海水を
置いておけば、塩みたいになるだろう
か・・・。

ず止めるかもしれない、と覚悟して
いた。
「山に帰る」と訴えられる度に、「大
人たちは、学校を止めた後の人生の厳
しさを知っているからMCLに残るよ
うに言うけれど、ジョバートの人生だ
から、自分で決めていいんだよ。学校
を止めて山の仕事で生きていく人生
も、ジョバートがそうしたいなら応援
するよ」と伝えていた。
それでも、どうにか小学5年生を終
了し、進級できることが決まった。ピ
サヤ語にもすっかり慣れた。そして、
なんと、6年生になってもMCLから
通学することにしたらしい。

私は、新学期からもMCLで彼と元
談ばかり言っていて笑えるのが、うれしい。

わたしの少女時代の 思い出から (7)

松居 エープリルリン

午後5時をまわった頃、私は家につくと、日常の仕事をするために着替えだ。そして、いつものようにまずご飯を炊いた。そして、竈の上にかけてたまま、山羊を捕まえに裏庭に出ていった。

叔母は、山羊を5匹飼っていた。1匹は雄山羊で2匹は雌山羊、そして2匹の子ヤギがいた。私は毎朝、山羊たちを裏庭に連れ出すと、草を食べさせるために木につないだ。そして、お昼になると、彼らの喉を潤すために水辺につれていった。午後には、縄をほどくと柵に入れ、塩の入った水をあたえ、イピルイピルの葉を夕ご飯に食べさせた。

オイン オイン オイン!

とつぜん裏庭から豚の鳴く声があった。あわてて台所にとびこむと、私はナイフをもってカンコンの葉をとり、細かく刻んでモミ殻と水に少し塩を加えて豚に与えた。

私が近づいていくと、豚たちは大騒ぎする。少しでも前に出ようと、お互いに押しあいながら食卓に駆けてくると、必死に鳴き声をたてながら寄って

きて、木の器にエサを入れてやると、互いに鼻で押し合いながら真っ先に食べようとした。そして、お腹がいっぱいになると、静かになって、数匹は眠った。

私は、ホースの水で豚小屋を洗った後に、豚の体も洗ってあげた。くさい臭いが外をただよって、隣近所に迷惑をかけたないように。

そのあと、私はココナツのなっている場所に行くと、三つのココナツの実をとって半分に割り、中身をこすってニワトリのエサを作った。ニワトリのエサは、普段はどこにでも生えているココナツの実だった。しかし、ちよっとお金があるときは、モミ殻を買うことが出来た。そしてトウモロコシの収穫があったときは、その種を蒔いてあげるのが一番簡単なエサのやりかただった。

ニワトリにエサをやったあと、巢をのぞいて卵を産んでいないか確かめた。でも、卵が一つも見つからなければ



ば、そのまま台所にもどるしかなかった。

わあ!

台所にもどったとたん、私は叫んだ。お米を炊いていたことを忘れていたのだ。ご飯は、ほとんど炊きあがっていたので、私はあわてて竈から石炭をかきだした。幸い、ごはんはまだ焦げていなかった。もし気づかなかつたら、真っ黒焦げになっていただろう。

夕方6時半になると、魚のスープを作るための野菜と香辛料を用意しなければならなかった。

野菜は西洋ワサビ、香辛料はレモングラス、シヨウガ、タマネギ、トマトにコシヨウとネギの葉、それが魚のスープの下味だった。

鍋に水を入れると、まず水をわかすために炉の上においた。煮立つと、ネギの葉以外の香辛料を鍋の水のなかにいれて、味付けのための塩を加え、さらに数分煮立たせながら塩が溶けるよ



うにかきませた。その後、野菜を入れる前に、まずは魚を先に入れてから煮えるまで数分おき、煮すぎないところで最後に西洋ワサビとネギを入れた。そしていよいよ魚のスープが出来上がると、炉から鍋を降ろして安全な場所に移した。

そのとき私は、誰かが来たような気配を感じた。ドアの開け口の方で足音がして、胸に手を当てた! 私は家に一人っきりのはず、もしも何か起こっても、誰も助けてくれないわ!

するとドアの取っ手が動き、突然開いた。私の胸が高鳴った。ビククリして、心臓が飛びよさうな気がしたけれど、見ると叔母さんだった。農場から帰っ



ミンダナオ子ども図書館についての情報、2006年からの日々の活動報告など詳しくはウェブサイトのホームページを参照されると、より深くわかります。

検索:「ミンダナオ子ども図書館だより」

<http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews.htm>
フェイスブック: 松居友 or ミンダナオ子ども図書館

てきたのだ。

「まあ、どうしたって言うの？なぜ、そんな目で私を見つめているの？まるで幽霊みたいに！」と叔母はいった。

「ああ！何でもないので。誰が入ってきたのか不安になったの。ノックも無かったから」と私は答えた。

「わかったわ。とりあえず採ってきた野菜を台所に運んでちょうだい」と叔母はいった。

「はい、おばさま」私は答えた。

テーブルの準備は出来て、夕食の支度が完了すると、家の人たちは7時から夕食を食べ始める。

その間に私は、服とシートと他の洗濯物を洗うために、洗濯場に行った。



洗濯機はないから、手で洗うほか仕方が無い。最初に、洗濯物の仕分けをし

なければならぬ。まずは、農作業用の服と普段着をわけた。なぜなら、農作業用の服は汚れがひどかったから。

その後、色の付いている服と白い服を分け、さらに厚手と薄手の服を分けて下着を別にした。

それが終わると、ポンプから水を汲んで来て、洗濯物を洗い流すために使う二つの大きなゴムバケツに水を満たした。そしてバケツを持ってくると、そのなかで洗濯を始めた。

その時また、だれかが私の名を呼ぶのを聞いた。私は当惑してどこから声がするのか耳をそばだてた。しかし、声は突然聞こえなくなった。

たぶん空耳ね。

そうおもって、洗濯を続けた。そして9時15分を過ぎた頃、洗濯をし終わり干し場にかけて。そしてとてもお腹がすいていたので台所の裏に行ってお腹がすいていたのでよく見ると籐籠のおおいの下に、家の人が食べ残した夕食が置かれているのを見つけた。

魚の残りが半分と、トウガラシとお酢と小さな塩魚を見つけたとき、お腹がグググウ鳴った。とてもお腹がすいていたから、食べものを見つけたら、あつという間に平らげた。そして食べ

終わると、すぐに食器洗い場に入った。

食器洗い場には、沢山の食べ終わったお皿が重なって置いてあった。家の人たちは、食べ終わったお皿を洗うこともしなかった。私が全てをきれいに

してきちつと整理整頓してから、再度外に出てポンプから水を汲み、明日のための水をゴムバケツに満たした。なぜなら、私たちの村から水源は遠かったし、村には沢山の人がいたから。特に昼間は水を使う人が多くて、夜のうちに汲んでおかなければ足りなくなってしまうから。

「わあ！何て明るくてきれいな空！今日は、満月ね！満月の日は、満潮ね！」



私は、お月様が本当にもるいので驚いた。海辺からは、まるで木々の間を

風が吹き抜けるかのように潮騒が聞こえてくる。波の音が、子守歌のようにザブーン、ザブーンと耳をくすぐる。

波音は、私の心を穏やかにしてくれ、私の想いは波に包まれて浜辺へと飛んだ。

浜辺に立って夜空を見あげている間、またたいしている美しい星々の事を想わずにはいられなかった。周囲を見わたしていると、月と星の明かりで宇宙全体が輝いて見えはじめた。冷たい風の音が、まるで浜辺の波の音のように聞こえてくる。波打ち際を歩いていくあいだ、波が私の足を洗ってくれた。周囲の砂がクリスタルのような美しさと輝きだした。

「へい、どうしんだい！なぜ空を見つめているの。ぼおっとして、まるで目と心がどこか遠くに行ってしまったみたいだね。」

私の肩がたたかかれて、後ろから叔母の声でした。

「ああ、叔母さん！」私はいった。そして、とつぜん瞑想から目覚めた。

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、食べられないときと、
お金が無くて学校に行けないとき、病気になるでも治せないとき・・・



ミンダナオ子ども図書館支援方法

- 1、**医療や読み聞かせ等の活動全般にかかる経費と子供たちの生活費を支援**・・・自由寄付
直接下記の振替口座をお願いします。寄付をくださった方には隔月に機関誌『ミンダナオの風』と年一回絵本をお届けします。

自由寄付は、一番根幹になる寄付です。貧困集落に住んでいる子供たちの薬から手術に至るまでの医療費。まだ支援者が見つからないにも関わらず放っておかず採用している140名ほどの奨学生達の学費。保護を必要として、MCL本部や下宿小屋に住み込んで学校に行かせている200名ほどの奨学生の生活費。ガソリン代を含む活動全般の諸経費等々に充てています。

機関誌を楽しみにしている方の場合、わずかな寄付でもお送りします。

他の方々に紹介していただければ幸いです。不要の方は、ご一報ください。

- 2、**植林環境支援**・・・6万円（ゴム、カカオの木600本、1ヘクタール、現地作業代）
洪水対策と先住民が土地を手放さないようにするための、経済自立支援です。
- 3、**保育所建設支援**・・・90万円（簡易保育所は止め、スタンダードにしました）
総コンクリート製をご希望の方は、130万円可能です。
開所式の参加や訪問も可能です。毎年チェックし、必要な場合は修理をしていきます。

スカラシップ支援

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも孤児や片親、母子家庭や崩壊家庭の子、親がいても兄弟が多く学校にいけない子を採用の基準とし大学まで通えます。その中の特に何らかの事情で保護を必要としている子は本部に住み生活を保障（現在80名）。支援には学費の他に、医療費、制服、学用品、小遣い、下宿代、生活費等が入っています。

- 1、**大学生スカラシップ支援**・・・年額70000円（月額5833円）
- 2、**高校生スカラシップ支援（日本の中高生）**・・・年額60000円（月額5000円）
- 3、**里子支援（小学生）**・・・年額40000円（月額3333円）

スカラシップの場合は、振り込み用紙の通信欄に「大学」または「高校」「里子」と書いて振り込んでいただければ、現地スタッフの宮木梓よりお便りします。

その後、機関誌に同封して高校・大学生の場合は本人からの手紙（英語）、6月にスナップ写真、8月に成績表、12月にはカードが届きます。プレゼントや文通も可能です。日本語の手紙は、現地で翻訳して当人に渡しています。

小学生の里子の場合は、手紙はありません。プレゼントは可能ですが、文通は出来ません。

事前の紹介や希望、訪問などのご相談は、メールで現地スタッフの宮木梓（あずさ）さんか、FAXで日本事務局の前田容子さんに！訪問の際は、ダバオ空港にお迎えに行き、MCLに宿泊していただき自宅にもご案内します。宿泊費はとりません。

奨学生の紹介、質問、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、
メール mclmindanao@gmail.com 現地日本人スタッフ：宮木梓（あずさ）
FAX： 0743 74 6465 日本事務局 前田容子

詳しくはウェブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館だより」
<http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews.htm>

ゆうちょ振り込み口座 00100-0-18057：加入者名『ミンダナオ子ども図書館』

（ネットバンキングも可能です） ■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900
■店番 019 ■預金種目 当座 ■店名 ○一九店（ゼロイチキユウ店） ■口座番号 0018057

講演会、報告会、家庭集会に、松居友が講演料、謝礼に関係なくうかがいます。
サイト『ミンダナオ子ども図書館だより』から年間のスケジュールをクリックすれば、空き日が確認できます。
メールや電話でもお申し込みください。講演を企画してくださるのも、大きな支援です。 12
メール：mcltomo@yahoo.co.jp 電話番号：080-4423-2998（日本および現地転送・松居友）